

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 13 日現在

機関番号：32507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350941

研究課題名(和文) 幼児の身体感覚を育てる保育方法の開発

研究課題名(英文) Development of the childcare method to improve preschoolers' body sensation

研究代表者

前田 泰弘 (Maeda, Yasuhiro)

和洋女子大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：10337206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、保育園や幼稚園での生活で幼児が示す気になる行動(たとえば「友達を叩く」「集まりで座ってられない」)の背景を身体感覚の偏り(過敏性や鈍麻性)の面から評価すること、保育者が幼児の身体感覚の向上の視点から保育を計画・実践するための資料を整理することを目的としていた。結果から、気になる行動を示す幼児はそうでない幼児に比して、身体感覚の偏りが全般的に大きいことが分かった。また、幼児が身体感覚を使う活動をすることで、その偏りが改善する可能性が示唆された。一方で、気になる行動を特定の身体感覚の偏りとの関連から説明するためには、さらなる検討が必要であり、今後の課題となった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to evaluate the background to worrisome behavior displayed by young children at nursery schools and kindergartens (for example, "hitting classmates," or "inability to sit still during gatherings"), in terms of deviations in physical sensations (hypersensitivity and blunted sensitivity), and to organize materials for childcare planning and practice from the viewpoint of caregivers to improve the physical sensitivity of young children. The results showed that deviations in physical sensations between children with worrisome behaviors compared to those without, are generally large. In addition, they suggested that it is possible to improve these deviations through activities that have the children use their body sensations. On the other hand, further study is required in order to explain the connections between worrisome behaviors and specific deviations in physical sensations, and this is a challenge for the future.

研究分野：障害児治療保育学

キーワード：幼児の身体感覚 幼児の気になる行動 不器用

1. 研究開始当初の背景

本報告の筆者ら(以下筆者らとする)は、発達臨床の専門家として保育所や幼稚園への巡回発達相談を行ってきた。近年、「落ち着きが無い」「お集まりで座ってられない」「衝動的に他児を叩く」など対応に苦慮される幼児の相談を機会が増えてきたが、保育者に対してその背景を伝える際に、確固とした根拠の基にその状態を説明することが難しい現状があった。実際のところ、このような幼児は、注意欠陥多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)、広汎性発達障害(PDD)などの、いわゆる発達障害に近似した特徴を示すことが多かったが、母子保健法の枠組みで行われてきた従来の健康診査(1歳6ヶ月児健診、3歳児健診)では、十分にスクリーニングされないという実態があった(小枝ら、2006)。その結果、集団保育において対応が苦慮されながらも、保護者の同意が得られにくいことから専門的な対応につながりにくい現状があった。

このような子らは発達が気になる幼児(子)などと呼ばれ、多くに身体活動の拙劣さ(不器用さ)を示すことが近年知られてきている。そして、その拙劣さの背景には、視覚・聴覚といった感覚情報の入力や前庭感覚や固有受容覚などといった姿勢や動きを作るために必要な身体感覚に偏り(敏感さや鈍感さ)を示すことが分かってきた。このような子どもの身体感覚とその改善に注目した研究は、これまで作業療法(たとえば感覚統合療法)や障害児教育(たとえば小林-フロスティッグムーブメント)などの分野で行われてきているところである。しかし、幼児期を対象として身体感覚の客観的評価を行い、保育者がそれを基に改善・向上のための保育計画を作成・実践するという一連の体系化に向けた研究は行われていないという現状があった。

2. 研究の目的

そこで、本研究ではいわゆる「発達が気になる幼児」について、その特徴である身体感覚の偏りを保育者が客観的かつ簡便に評価できる方法を開発すること、そしてその評価に基づいて、幼児の身体感覚の偏りを改善するための保育を、保育者自身が計画・実践できるよう、従来の保育の手法を再構成・体系化することを試みるものである。

具体的には幼児の気になる行動と身体感覚に着目し、保育所と幼稚園に在籍する保育者を対象として気になる行動と身体感覚の偏りの関連性を質問紙により調査し明らかにする。また、身体感覚の向上・改善を、日常の保育で行われる動きづくり(運動あそび、リズムあそび等)を通じて行えるよう、日常の保育で行われる活動を調査し身体感覚の面から整理の上、発達に応じた活動指標として体系化することを目的とした。

3. 研究の方法

研究全体では以下の2点の方法を用いることとした。

(1) 幼児の身体感覚評価のための質問紙の開発: まず、幼児の身体感覚の発達状況についての実態調査を行い、そのデータの整理と分析から質問紙の初版を完成する。また、これを保育現場で使用し妥当性と信頼性の検討を行う。

(2) 幼児の身体感覚の発達を促す保育内容の体系化: 保育現場で実践されている動きづくりの現状と動きづくりを積極的に行う園の子どもの実態を調査し、整理・分析を行う。これを基に子どもの身体感覚の状態に整合した動きづくりのための身体運動の指標を作成する。

4. 研究成果

(1) 「保育における幼児の身体感覚の向上と気になる行動の改善」: 【はじめに】筆者らはこれまで自然環境の中での個別的な配慮を通じた野外保育を行ってきた。そこでは、個の興味・関心やペースが保証される中で直接体験の機会を重ねることが、幼児の身体感覚を高めその後の育ちや生活の拡大・向上に効果的であることを報告してきた。この成果を集団の保育に適用するため、保育所や幼稚園で気になる行動を示す幼児について、その行動と身体感覚の偏りの関連性を検討しようと考えた。具体的には、保育者が感じる幼児の気になる行動と幼児の身体感覚の状況について調査を行い、それらの関連性について検討を行い、その結果を報告することとした。【方法】対象児: 筆者らが巡回相談(発達相談・保育相談)等で関わる保育所(4園)、幼稚園(2園)に在籍する3歳クラス児(以下3歳児)52名(男児26名、女児26名)、4歳クラス児(以下4歳児)97名(男児47名、女児50名)。手続き: 担当保育者にクラス児全員の身体感覚の状態を日本感覚インベントリー(JSI-R)を用いて評価するよう依頼した。さらに保育者には、幼児を日常の様子から「気になる子」、「少し気になる子」、「気にならない子」に分けることと、全ての児の気になる様子を39項目の行動から選択あるいは自由記述する形で記録を依頼した。なお、JSI-Rは幼児の身体感覚の状態を評価するスケールである。前庭感覚、触覚、固有受容覚、聴覚、視覚、嗅覚、味覚、その他の感覚を反映すると考えられる行動項目(146項目)を「いつもある(4点)」から「全くない(0点)」の5段階で評価するものである。集計された総合点により、身体感覚の状態や偏りの様子を評価するものである。【結果】保育者が気になる幼児の行動: 気になる幼児の行動は、3歳児52名では400件、4歳児97名では552件挙げられた。この行動を各年齢の「気になる子」、「少し気になる子」、「気にならない子」の群に分け、各群で発現率が高いものから示した(表1)。なお、各

群の内訳は、3歳児が18名・12名・22名、4歳児が32名・25名・40名であった。幼児の身体感覚の状況：各年齢の各群で集計した身体感覚の状況（JSI-Rの結果）と平均値の群間比較は表2の通りであった。Tukeyの多重比較の結果、3・4歳児とも嗅覚を除く全領域で気になる子とならない子の群間に有意差があった(p<.01)、また少し気になる子と気にならない子の群間には全領域で有意差がなかった。気になる子と少し気になる子の群間では、3歳児の前庭、固有、味覚、その他と4歳児の味覚で有意差(p<.05)が、他の全領域でも嗅覚を除き有意差(p<.01)があった。

表1:各年齢における気になる行動の発現数と発現率

3歳児 (n=52)		*行動の後の()内の数字は発現数			
気になる子(n=18)	%	少し気になる子(n=12)	%	気にならない子(n=22)	%
姿勢が崩れる(12)	42.9	抱っこを好む(7)	58.3	自信がない(6)	27.3
寝ころが寄りかかる(11)	39.3	ぼんやりしている(5)	41.7	抱っこを好む(5)	22.7
声が大きい小さい(11)	39.3	なかなか寝付けない(5)	41.7	他児を叩く(4)	18.2
気が散りやすい(11)	39.3	寝ころが寄りかかる(4)	33.3	なかなか寝付けない(4)	18.2
騒がしいと落ち着かない(10)	35.7	一斉声掛けを理解困難(4)	33.3	気持の切替難しい(4)	18.2
		注意されることが苦手(4)	33.3	場に合わないふざげ(4)	18.2
		環境の変化に弱い(4)	33.3		

4歳児 (n=97)		*行動の後の()内の数字は発現数			
気になる子(n=32)	%	少し気になる子(n=25)	%	気にならない子(n=40)	%
一斉声掛けを理解困難(19)	59.4	なかなか寝付けない(9)	36.0	抱っこを好む(7)	17.5
集中して話を聞けない(19)	59.4	注意されることが苦手(9)	36.0	なかなか寝付けない(6)	15.0
騒がしいと落ち着かない(17)	53.1	失敗すると気が崩れる(7)	28.0	自信がない(6)	15.0
場に合わないふざげ(17)	53.1	幼児音がある(6)	24.0	寝起きが悪い(6)	15.0
姿勢が崩れる(16)	50.0	ぼんやりしている(6)	20.0	声が大きい小さい(5)	12.5

表2:各年齢、各群の身体感覚評価(JSI-R)の結果

3歳児 (n=52)	気になる子 (n=18)	少し気になる子 (n=12)	気にならない子 (n=22)	検定の結果
総合点	114.3	52.8	35.0	(F(2,49)=20.639, p<.001)
前庭	23.9	11.6	7.1	(F(2,49)=11.678, p<.001)
触覚	11.2	3.9	3.8	(F(2,49)=10.432, p<.001)
固有	21.5	11.2	8.8	(F(2,49)=7.185, p<.01)
聴覚	8.3	5.4	3.8	(F(2,49)=30.361, p<.001)
視覚	16.9	6.6	3.3	(F(2,49)=32.596, p<.001)
嗅覚	0.6	0.0	0.3	(F(2,49)=1.706, n.s.)
味覚	2.8	0.8	0.2	(F(2,49)=8.774, p<.01)
その他	19.8	12.8	8.6	(F(2,49)=15.481, p<.001)

4歳児 (n=97)	気になる子 (n=32)	少し気になる子 (n=25)	気にならない子 (n=40)	検定の結果
総合点	78.6	21.0	14.3	(F(2,94)=42.893, p<.001)
前庭	16.7	6.0	3.3	(F(2,94)=21.475, p<.001)
触覚	17.2	3.9	3.1	(F(2,94)=29.823, p<.001)
固有	4.9	0.8	0.7	(F(2,94)=19.166, p<.001)
聴覚	10.6	3.2	2.3	(F(2,94)=21.021, p<.001)
視覚	9.0	1.8	0.8	(F(2,94)=27.451, p<.001)
嗅覚	0.5	0.0	0.2	(F(2,94)=1.221, n.s.)
味覚	3.1	0.9	1.0	(F(2,94)=5.139, p<.01)
その他	16.8	4.5	3.1	(F(2,94)=80.839, p<.001)

【考察】

保育者が気になる幼児の行動では、3歳児、4歳児ともに気になる子では、姿勢の保持や力のコントロール、情報の入力への適応に困難さを示す様子が見られた。身体感覚の状況も、気にならない子に比較して、全ての領域で偏りが見られており、気になる行動の背景に身体感覚の偏りの影響があることが分かった。少し気になる子は多くの領域で気になる子よりも身体感覚の偏りが小さかった。3歳児では、姿勢や力のコントロール、外界からの刺激への不適応が目立つことから、気になる行動の背景に、体性感覚系を中心とした偏りや未熟さの影響が大きいことが示唆された。4歳児の少し気になる子では、

自分もつイメージと現実との不整合による自己コントロールの困難さが目立った。がこの状況は外界の情報を把握できているということでもあるので、身体感覚の偏りを改善することで外界の情報把握が促されると考えられた。以上から、外界とのかかわりの中で行動の範囲やバラエティを拡大する幼児にとっては、身体感覚の向上や改善をねらった保育活動(例えば「動きづくり」を通して)の計画と実践が大切であることが指摘できると考えられた。

(2)「野外保育における発達に気になる幼児の行動変化と保育士の関わり」:【目的】発達が気になるとされる幼児には、身体感覚の歪みがあることが知られているが、これらの歪みは身体感覚の直接的な体験を促す活動を繰り返すことで改善されることが報告されてきた。報告者らは直接的な体験の方法として自然環境を利用した野外保育を行い、その効果を検証してきた。本研究では、野外活動の際に子どもの行動の拡がりに効果的であったと考えられる保育士のかかわりの事例を分析し、その配慮を体系的に整理することを目的とした。【方法】手続き:発表者らの保育施設に隣接する山林で、本児に対し保育士1名がかかわる個別保育の形態で行なった。対象児:A男(初回来所時4歳8ヶ月、男児)。医療機関より広汎性発達障害の疑いを告げられている。野外保育の経過:野外保育における保育記録について、4ヶ月毎に子どもの行動の変化と、その過程での保育士のかかわりを分析する。

野外保育開始時の様子:開始当初の姿として、「走る際に足が絡まる・ふらつく」、「斜面を下る際、腰が引けてしまい、身体を横向きにして下りる」、などといった身体コントロールの不器用さや、「フェンスをくぐる際に頭、背中、お尻をぶつける」といったボディイメージの未熟さ、「筆圧が強い」、「楽器を強く叩く」などといった力のコントロールの不得意さが見られた。また、「相手の状況を理解することができず自分中心に動く」、「気持ちが高ぶると言葉や行動が乱暴になる」などといった感情コントロールの拙劣さや「保育士と離れると不安になる」、「新しい道や場所に行くことを拒む」など、不慣れな環境へ不安を示す姿が見られた。さらに、眼で見たものはできると考える傾向があり、失敗した時にその理由を理解できないなどのイメージ変化への不得意さも見られた。【結果】野外保育時の行動変化と保育士のかかわり方>第1期(開始から4ヶ月):外界のものを使って遊びを創り出す(考える)ことや自分の身体の動きを知ること为目标とした。この頃の様子としては、「石の上に乗ったり、跳んだりするがバランスを保つことができる」、「勢いよく走るが、段差があると足の脛をぶつける」、「テーブルをくぐる際、頭をぶつける」、「筆圧が強い」、「言葉が乱暴である」、「石や木を使って遊ぶ」、「他者が大勢いると入って

こられない」、「遊んでいる際に危険なことがあると保育士に気をつけるよう伝える」などが見られた。この頃の保育士のかかわりは、「危険のない限り、児がどのようにするのか見守る」、「できたことを誉め、自信に繋げる」、「勢い(スピード)と身体の動きが合っていないので、なぜぶつけたのか具体的に伝える」、「言葉で伝えるとともに見本を示す」、「乱暴な言葉を言われた側の気持ちを伝えながら、言葉の見本を示す。この際、児を否定するような声かけはしない」、「児の遊びに賛同し、一緒に遊ぶ」、「無理強いをせず児の行動を待つ」、「保育士に教えてくれたことに対してきちんとお礼を言う」、「常に肯定的な声かけをする」などを行なった。第 期(開始後5~7ヶ月):第 期の様子を受けて、外界とのかかわりを密にし、自らが考え、判断し、行動に移すこと(直接体験・成功体験)で、自信をもつことができることを目標とした。この頃の様子としては、「ボールを蹴る際に動いているボールの方向に合わせて移動できる」、「バランスを崩しても、すぐに立て直すことができる」、「遊びに夢中になっても保育士の指示が入る」、「乱暴な言葉を使っても、保育士の言葉や表情を見て言い直す」、「散歩に行く際、持っていくものを自分で決める(何が必要か考える)」、「活動中、こうしよう・こうしたらいいなどと提案をする」などが見られた。一方、夢中になると距離感がつかめなくなる、「保育士が側にいてもボールを強く投げる」などの様子も見られた。この頃の保育士のかかわりは、「できていることを当たり前とするのではなく、児が気付くように声をかける」、「周囲をよく見るように声をかけると同時に、自分の身体の動きを意識できるように声をかける」、「タイミングを見ながら声をかける」、「指示を受け入れてくれた(話を聞いてくれた)ことにお礼を言う」、「賛同して一緒に遊ぶ」、「無理強いをせず、児の行動を否定しない」、「肯定的な声かけをする」、「児が考えて行動に移すことができるように声をかける」などといったことを行なった。

【考察】保育士は、第 期、 期とも「児や周囲に危険のない限り行動を待つ(見守る)」、「子どもの行動への肯定的な声かけを行なう」、「無理強いはしない」、「できていることに児が気付くように声をかけて誉める」、「自分で考える・試行錯誤する場を設ける」といったかかわりを行なっていた。このように、子ども自身が自らの興味・関心とペースで身体感覚を利用する直接体験の機会を増やしたことが成功体験が増え、自発的な行動や試行錯誤の機会を増やす誘因となったのではないかと考えられた。また、それらの経験が契機となり、さらなる行動の自発性や自信をもった行動を可能にしたと考えられた。(3)「幼稚園教諭が感じる気になる幼児の行動」:【目的】本研究では公立幼稚園に勤務する教員を対象として、幼児に見られる対応に

困った行動や気になった行動を調べ、集団参加の準備段階となる要因として自己のコントロールや他者とのかかわりとの関連から検討することとした。この結果をもとに、幼稚園での気になる幼児に対する教員の効果的な配慮の視点や外部からの専門的支援のあり方などについて検討した。【方法】対象:調査の対象は、A 県 B 市の公立幼稚園(13 園)に勤務する 91 名の教諭、支援員、補助員である。幼児の気になる姿を尋ねる調査紙を各幼稚園に郵送し、記入後返送するよう依頼した。調査時期は 2014 年 12 月から 2015 年 1 月であった。なお、本研究では教諭、支援員、介助員を合わせて教員として分析することとした。調査紙の調査項目:表裏に調査内容が印刷された調査紙を使用した。表面には性別、年齢、幼稚園教諭等としての教員歴(通算での勤務年数を 8 段階に分類)、幼児への援助に関する免許・資格、役職についてマークシート方式で回答するよう依頼した。また、裏面には「対応に困った行動や気になった子どもの行動」について、自由記述で回答をするよう求めた。回答の際は、それぞれの気になる行動が何歳児クラスで見られたかを同時に記述するよう依頼した。

分析の方法:回収された調査紙を集計し、教員が気になる行動を子どもの年齢別に整理した。また、回答を内容により分類して発現の傾向を分析した。【結果】調査紙は 91 名の対象に対して 73 名から回答があった。回答率は 80.2%であった。回答者の属性は、男性 8 名、女性 65 名であった。また、職種は教諭が 61 名(園長・副園長・教頭・主任を含む)、支援員・介助員等が 12 名であった。気になる行動に関する自由記述(複数回答)を分析した結果、14 種類(気持ちのコントロール、場面・予定の変更、こだわり、周囲への気づき、否定的表現、かかわり方、言葉での表現、感覚の偏り、衝動性、多動性、注意集中の困難、障害と遅れ、パーソナリティ、その他)に分類することができた。分類の結果、4 歳児では、気持ちのコントロールに関する行動が 86 件中 22 件(25.6%)、場面・予定の変更に関する行動が同 13 件(15.1%)、感覚の偏りに関する行動が同 12 件(14.0%)などが、高い比率で気になる行動としてとらえられていた。同じく 5 歳児では、気持ちのコントロール(23.2%)、感覚の偏り(12.1%)、多動性(12.1%)であった(表 3)。

【考察】本研究では、幼稚園に勤務する教員を対象に、気になるととらえられる幼児の実態を明らかにし、その改善のための効果的支援のあり方を検討することがねらいであった。分析の結果、幼稚園教諭の気になる幼児の行動は、その内容から 14 種類に分けることができた。そして、それらの行動には「衝動性」、「多動性」、「注意集中の困難」、「こだわり」、「場面・予定の変更」への不適応など、いわゆる発達障害に特有の行動が多く含まれることがわかった。幼児の気になる行動に

表3 各年齢児で見られた気になる行動

分類	4歳児(N=86)		5歳児(N=99)	
気持ちのコントロール	22	25.6%	23	23.2%
場面・予定の変更	13	15.1%	4	4.0%
こだわり	0	0.0%	2	2.0%
周囲への気づき	2	2.3%	7	7.1%
否定的表現	1	1.2%	4	4.0%
かかわり方	7	8.1%	1	1.0%
言葉での表現	6	7.0%	7	7.1%
感覚の偏り	12	14.0%	12	12.1%
衝動性	8	9.3%	9	9.1%
多動性	4	4.7%	12	12.1%
注意集中の困難	2	2.3%	7	7.1%
障害と遅れ	7	8.1%	7	7.1%
パーソナリティ	1	1.2%	3	3.0%
その他	1	1.2%	1	1.0%

ついて調べた先行研究として、たとえば佐久間ら(2011)は、気になる幼児の行動には発達障害に関連した項目が多いことを指摘し、勝田(2013)は、気になる子は広汎性発達障害や注意欠如多動性障害と診断されそうな範疇の子どもであることを指摘している。このように従来の研究は、気になる幼児の多くが発達障害の傾向と類似することを指摘しており、本研究の結果もこれらの先行研究を支持するものと考えられた。

また、本研究の結果では、発達障害に特有の行動を含め、社会性の広がりや拙劣さに関連する内容が気になる行動として多くあげられていた。ここで言う社会性とは、特に他者とのかかわりに関する行動である。たとえば、結果の中で「こだわり」や「周囲への気づき」の拙劣さに分類される行動とは、幼児が自らの周りの環境に十分に気づいていない状態であると考えられた。また、「気持ちのコントロール」や「場面・予定の変更」の拙劣さは、周囲には気づいているものの、それに自らの持つイメージを合わせることが難しい状態であると考えられた。さらに、「否定的表現」、「かかわり方」、「言葉での表現」は、周囲には気づいており、かつかわる意思もあるものの、その表現型(かかわり方)が適正でない状態であると考えられた。すなわち、本研究であげられた幼稚園教諭の気になる行動は、段階は違うものの総じて幼児が周囲とかかわる上での社会性の拙劣さが問題の中心になっておりと考えられた。そのように考えると、先に発達障害に特有の行動特徴とした「衝動性」、「多動性」、「注意集中の混乱」などは、周囲への気づきの有無にかかわらず自分自身をコントロールすることが難しい状態であると考えられる。すなわち自らの意思にかかわらず環境とかかわるためのセルフコントロールが難しい状態である。また、「気持ちのコントロール」や「感覚の偏り」も、外界の感じ方や受け取り方に関する自らの調整が難しい状態であり、セルフコントロールの拙劣さに含まれると考えられた。実際、本結果では、教員の気になる行動として、「気持ちのコントロール」や「感覚の偏り」、「衝

動性」が上位にあがっており、幼児のセルフコントロールの困難さを背景とした行動に対して、特に対応に苦慮している現状が明らかとなった。まとめると、本研究で示された教員が気になる幼児の気になる行動は、社会性の広がりに関する内容が中心になっており、その広がりには「セルフコントロール」、「周囲への気づき」、「かかわり」の拙劣さとして説明できると考えられた。このような気になる幼児のセルフコントロールの拙劣さについて、前田(2011)は、保育所における発達障害が気になる幼児の多くに身体感覚の偏りが見られることを報告しており、それがセルフコントロールの拙劣さの背景にあることを示唆している。また、前田ら(2009)は、それらの拙劣さをもつ幼児に保育の中で自ら感じ、考え、判断し、実行する環境を保障することや子ども自身の身体感覚を向上させる取り組みを行うことで、結果として幼児のセルフコントロールが向上し、ひいては他者とのかかわりや集団参加の準備が進むことを報告している。また、小笠原ら(2015)は、自閉的傾向があり保育所や幼稚園への適応が難しかった幼児に対して野外環境における個別的保育を行なうことで、行動が拡大していく過程を報告している。この報告では、当初、身体感覚の過敏性により、外界の接近・接触が難しかった幼児が、自然環境を利用した個別的な保育を行うことにより、自分のペースで外界と接する機会を得られた結果、外界への気づき、それとのやりとりを広がっていくこと、そして、結果として他者(人)への気づきとかかわりを形成していったことを報告している。このことから、気になる幼児への配慮については、集団への適応を視野に入れながらも、個の育ちを十分に保障していくことが大切であると考えられた。

【総合的考察】本研究の結果から、気になる行動を示す幼児はそうでない幼児に比して、身体感覚の偏りが一般的に大きいことが分かった。また、幼児が身体感覚を使う活動を行うことで、その偏りが改善する可能性が示唆されていることから、保育においてはその向上を図るための保育計画と実践を行うことが大切であることが指摘できる結果となった。一方で、気になる行動を特定の身体感覚の偏りとの関連から説明するためには、さらなる検討が必要であることが分かった。また、保育所と幼稚園では保育者が幼児に対して気になると感じる行動(保育において子どもに達成を求めている内容)が異なることが分かった。これらのことから、幼児の気になる行動の改善のためには、身体感覚の偏り、特に複数の身体感覚の偏りとの相互性や行動が起こる環境との関連性の点から検討することが必要であると考えられた。また、保育者の困り感が、幼児の行動自体から生起していることから、保育におけるより効果的な介入方法を考える上で、まず気になる行動間の関連についても検討をすることが必要で

あると考えられ今後の課題となるところであった。

<引用文献>

小枝達也(2006). 軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル. 厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)研究報告書, 5-11.

佐久間庸子, 田部絢子, & 高橋智. (2011). 幼稚園における特別支援教育の現状, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 62(2), 153-173.

勝田麻津子. (2011). 幼児教育者に求められる発達支援能力についての検討(1)幼稚園における特別支援アドバイザーの実践から. 環太平洋大学研究紀要, (4), 103-108.

前田泰弘, & 小笠原明子. (2009). 身体感覚の改善を基盤とした発達が気になる幼児の「育ち」の支援. 乳幼児教育学研究, (18), 19-29.

前田泰弘, & 小笠原明子. (2011). 保育園における幼児の気になる行動と身体感覚の偏倚の関連性. 東北福祉大学研究紀要, 35, 147-155.

小笠原明子, 立元真, & 前田泰弘. (2015). 野外保育における発達の気になる幼児の行動拡大への保育士のかかわりの効果. 宮崎大学教育文化学部紀要, 32, 81-90.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

前田泰弘 (2015)「保育者が気になる幼児の行動と身体感覚の育ちとの関連性」和洋女子大学紀要、査読有、第55集、p.119-126、和洋女子大学

URL:

https://wayo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1077&item_no=1&page_id=35&block_id=44

前田泰弘、小笠原明子 (2015)「幼児の気になる行動と身体感覚の偏りとの関連」保育文化研究、査読有、第1号、p.27-37、日本保育文化学会

前田泰弘・小笠原明子・酒井幸子・守巧 (2015)「幼稚園教諭が感じる気になる幼児の行動-「かかわりの育ち」の視点からの検討-」保育教諭養成課程研究、査読有、第1号、p.41-49、保育教諭養成課程研究会

〔学会発表〕(計6件)

前田泰弘、小笠原明子「保育における幼児の身体感覚の向上と気になる行動の改善(1)」, 日本保育学会第66回大会、2013年5月11日、中村学園大学(福岡県福岡市)

小笠原明子、前田泰弘「野外保育における発達が気になる幼児の行動変化と保育士

の関わり」, 日本保育学会第66回大会、2013年5月11日、中村学園大学(福岡県福岡市)

前田泰弘、小笠原明子「4・5歳児の気になる行動の発達の特徴」, 日本保育学会第67回大会、2014年5月17日、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

前田泰弘・小笠原明子「5歳児の気になる行動と身体感覚の偏倚との関連性」, 日本特殊教育学会第67回大会、2014年9月20日、高知大学(高知県高知市)

小笠原明子・前田泰弘「保育者が気になる幼児の行動特性(1)」, 日本特殊教育学会第68回大会、2015年9月20日、東北大学(宮城県仙台市)

前田泰弘・小笠原明子・守巧(2015)「保育者が気になる幼児の行動特性(2)」, 日本特殊教育学会第68回大会、2015年9月20日、東北大学(宮城県仙台市)

〔図書〕(計1件)

前田泰弘・立元真・中井靖・小笠原明子(2016)『実践に生かす障害児保育』萌文書林、東京。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 泰弘 (YASUHIRO, Maeda)

和洋女子大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号: 10337206

(2) 研究分担者

立元 真 (SHIN, Tatsumoto)

宮崎大学・教育学研究科・教授

研究者番号: 50279965